

## 7 黄疸の遷延した薬剤性肝障害の1例

渡辺 庄治・麻植ホルム正之  
 森 健次・太幡 敬洋・荻野宗次郎  
 川口 誠\*・野本 実\*\*  
 新潟労災病院内科  
 同 病理科\*  
 新潟大学第三内科\*\*

症例は41歳、男性。黄疸を主訴に平成15年8月26日受診。眼球結膜黄染、ビリルビン上昇あり、入院となった。総ビリルビン41.3と上昇。ビリルビン吸着と肝生検施行した。組織上肝細胞の大小不同および毛細胆管や肝細胞内に胆汁うっ滞を認めた。門脈域の線維性拡大はなく、小葉中心域で肝細胞索の乱れと線維増生が見られた。また、同部には類洞内にマクロファージの増生が見られた。計2回のビリルビン吸着と保存的治療で軽快した。

野本らは薬剤性肝障害の組織標本60例を検索、小葉間胆管の80%以上で胆管消失が見られた場合、胆汁うっ滞が遷延し6ヶ月以上の黄疸を伴い組織学的には小葉改築傾向を来たす、と報告している。本症例の肝生検で小葉間胆管の消失率は軽度で黄疸遷延の割には胆管傷害は軽度であった。

黄疸の遷延はみられたが、肝生検による病理組織学検討によって小葉間胆管障害・消失が低率であり、病変が進展せずに回復する事を予見できた。

## 8 Sinusoidal T-cell lymphoma と鑑別を要したサイトメガロウイルス肝炎の1例

牛木 隆志・富樫 忠之・渡辺 孝治  
 関 慶一・石川 達・太田 宏信  
 吉田 俊明・上村 朝輝・小山 覚\*  
 武田 敬子\*\*・石原 法子\*\*\*  
 済生会新潟第二病院消化器科  
 同 血液治療科\*  
 同 放射線科\*\*  
 同 病理検査科\*\*\*

症例は37歳、男性。2005年9月8日、全身倦怠感と夜間の発熱が出現。9月27日、当科を紹介

受診。A型肝炎、B型肝炎、C型肝炎、IM、PBCは否定的であった。10月4日、肝生検施行。門脈域は正常から軽度拡張し、小円形細胞の浸潤を認めた。また、類洞内にCD8(+)の小型軽度異型Tリンパ球を認め、sinusoidal T-cell lymphomaに類似した像を呈していた。10月19日、骨髓穿刺施行。異型リンパ球が散見されるのみであった。保存的加療にて退院。退院後、CMV-DNAが血液中、尿中共に陽性でDNA血症を呈しておりCMV肝炎と診断した。CMV肝炎の組織学的特徴として門脈域、類洞内への単核球浸潤が知られているが、類洞内への細胞障害性T-cellの浸潤は時に、sinusoidal T-cell lymphomaと類似する画像を呈することがあり、示唆的症例と考え報告した。

## 9 B型慢性肝炎、肝硬変における抗ウイルス療法の現況

和栗 暢生・五十嵐健太郎・滝沢 一休  
 池田 晴夫・岩本 靖彦・相場 恒男  
 米山 靖・古川 浩一・月岡 恵  
 新潟市民病院消化器科

当院で2001年からの5年間でラミブジン(LMV)治療を行った32例(慢性肝炎24、肝硬変8)を対象とし、ウイルス学的効果、中止後の再燃、耐性化、breakthrough hepatitisなどについての解析を行った。投与6M、12M後の血中HBV-DNA陰性化率は全体で83.8%、71.0%でHBeAg陰性例、HBV-DNA量7LGE/ml以下の症例で高い傾向がみられた。投与中止後の再燃は55%でみられ、全例でLMVが再開されていた。LMVに対する耐性化は56.5%にみられ、耐性化時期中央値は14ヶ月であった。耐性化症例の46.1%にbreakthrough hepatitisがみられた。breakthrough hepatitisの3例にアデフォビルが併用されたが、有効であった。肝硬変症例8例での検討では血清アルブミン値を含めた肝予備能の改善した症例が半数以上で、有用性が示唆された。B型慢性肝疾患治療において抗ウイルス薬の占める位置は大きい、適応症例を十分検討する

と共に、中止後の再燃，耐性化，breakthrough に対して十分な配慮が必要と思われた。

## 10 経頸静脈的肝生検吸引生検針の開発

石川 達・牛木 隆志・富樫 忠之  
渡辺 孝治・関 慶一・太田 宏信  
吉田 俊明・石原 法子\*・上村 朝輝  
済生会新潟第二病院消化器科  
同 病理検査科\*

【目的】経皮的肝生検は高度の出血傾向を示す症例では禁忌とされている。このような症例に対し経頸静脈的肝生検が行われるが，cutting Needle においては，診断に苦慮する症例も存在していた。そこで，われわれは経頸静脈的肝生検吸引生検針を開発し，その有用性について検討した。

【対象と方法】Cutting Needle を用いた 10 例と共同開発した吸引生検針を用いた 15 例の施行時間，回数，組織診断率を検討した。

【成績】平均施行時間は Cutting Needle で 47.1 分，吸引生検針は 29.3 分と有意に低下した。Cutting Needle では 1 検体採取に対する平均穿刺回数は 1.8 回であったが，吸引生検針では 1 回で穿刺可能であった。

【結論】TJLB の適応例は多く潜在するものと考えられる。この中で吸引生検針は十分な組織の採取と施行時間の縮小，穿刺回数の軽減に貢献した。本生検針を用いた TJLB は安全で有効な手技と考えられた。

## 11 早期肝細胞がんからの脱分化過程と考えられた AFP-L3 分画の上昇を伴う直径 15mm の肝細胞がんの 1 例

阿部 聡司・岩永 明人・玄田 拓哉  
夏井 正明・姉崎 一弥・本間 照  
関根 輝夫・原 秀範\*  
県立新発田病院内科  
原消化器内科医院\*

症例は 59 歳，女性。C 型肝硬変にて経過観察

中，AFP 29.3ng/ml，L3 分画 31.8 % と上昇認め，肝細胞がんの発症を疑われ紹介された。

【検査成績】AFP30.3ng/ml，L3 分画 41.5 %，PIVKA-2 32mAU/ml

【画像所見】肝外側区域に 1 cm 大の結節内結節型の肝細胞がんの所見を認めた。動脈，門脈血流が低下した結節内に動脈血流の増加した結節を認めた。MRI で，T1 で辺縁高信号，中心部低信号，T2 では共に低信号だった。SPIO 造影 T2 \* 強調画像で，中心部に取り込み低下を認めた。

【病理所見】辺縁は早期肝細胞癌，中心部は進行肝細胞癌の所見であったが境界は不明瞭であった。顕微鏡レベルで内部に異型の強い細胞集団が存在し，AFP 免疫染色陽性であった。

【考察】この病変は早期から進行肝細胞癌への脱分化過程と考えられた。AFP-L3 分画の上昇は進行肝細胞癌の発生に伴う変化と考えられるが，本病変では内部の更に小さな脱分化巣を反映している可能性が考えられた。

## 12 DIC にて死亡した肝腫瘍の 1 例

廣野 玄・馬場 靖幸・長谷川勝彦  
曾我 憲二・柴崎 浩一  
日本歯科大学新潟歯学部附属医科病院  
内科

症例は 51 歳男性の大酒家。トロトラストや塩化ビニールなどの曝露歴はない。平成 2 年大量飲酒後に前胸部痛を自覚し当科に精査入院。腹腔鏡にて馬鈴薯肝を認め，アルコール摂取の関連性が示唆された。その後外来通院していたが，平成 17 年 10 月より鼻出血や両下肢の皮下出血が出現し当科に再入院。血液検査では DIC を呈しており，腹部 CT では肝前区域に単純で境界不明瞭な低吸収域を示し，造影で不均一に濃染される巨大な腫瘍を認めた。DIC に対する治療を行ったが効果なく，肝腫瘍は増大し，腹腔内出血にて死亡した。肝ネクロブシーでは腫瘍細胞は keratin (－)，CD31 (＋) であったことから，馬鈴薯肝にびまん性肝血管肉腫を合併した稀な症例と考えられ，若干の文献的考察を加えて報告する。